

回覧

令和 2 年(2020 年)度 第九回 定例役員会 2020 年 9 月 5 日(土)

～2020 年 9 月 5 日(土) 作成～

< 館長報告 >

館長 土井 承夫(どいよしお)

初秋の季節とはいえ真夏を思わせる様な暑い毎日が続いておりますが、皆様におかれましてはお元気でお過ごしのことと存じます。

<令和 3 年度倉吉市コミュニティー助成金申請要綱の入手>

8 月 25 日(火)に令和 3 年度のコミュニティー助成金申請要綱を倉吉市殿から入手しました。昨年度落選した今回の公民館新築財源の根幹をなす重要な助成金であります。6 月の「館長報告」で申し上げたように今回は絶対失敗は許されません。現在、全身全霊を以て昨年提出した 50 ページに及ぶ申請書の内容を精査し現状に即した一点の隙(すき)のない内容にアップデート(最新事情に合うように一部修正する事)する作業を進めております。来週中の 9 月 11 日(金)までには提出致します(提出期限:9 月 30 日)再度申し上げますが、

今回は「**不退転の決意(ふたいてんのけつゐ)**」を以て進めて参ります
・・・**何があってもくじけず、屈することなく突き進むという信念の事**・・・

～皆様の応援をお願い致します～

<公民館新築の今後の予定>

今後の福庭自治公民館新築スケジュールは次の様になります。

9 月上旬 コミュニティー助成金申請書の提出 →令和 3 年(2021 年)3 月下旬に
上記助成金受給決定通知 → 同年 5 月 業者の指名入札 →6 月 解体作業の
着工→7 月 新築工事の着工 → **令和 3 年(2021 年)11 月末 新公民館の完成**

<福庭自治公民館新築特別寄附金（自主的な寄附）の集計状況>

住民の皆様からの上記の自主的な寄附金の集計状況をこの後もこの館長報告でお伝えしていきます。ご寄附は本年 2020 年 11 月 30 日まで受け付けます。受け付け窓口は館長の私、土井承夫です。（26-0770、携帯 080-4261-1979）お電話を下されば、ご持参いただかなくとも私が戴きに参ります。

*令和 2年(2020年)8月31日(月)現在の集計結果(総計)は次の通りです。

(1) 寄付頂いた世帯数： 141 世帯 (全体の約 34.1%)

(2) 寄附金の合計： 457 万円

(3) 個々の寄付金額の概要：最高額：30 万円 (1 名) 30 万円 (福庭青年団) 25 万円 (2 名：1 名は福庭、もう 1 名は福庭以外の方です) 10 万円 (13 名) 5 万円 (10 名)、3 万円 (20 名)、2 万円 (13 名)、1 万円 (80 名) 他

(先月報告の内容と同じです)

～ 館長のちょっと一服コーナー ～

千住 3 兄弟の長男で日本を代表する日本画家の一人、千住 博 (62 歳) が取り組んでいる空海 (くうかい) が開祖の高野山真言宗総本山金剛峯寺 (こんごうぶじ) 大主殿の襖絵 (ふすまえ) についてのお話です。空海は、「弘法大師 (こうぼうだいし)」や「お大師 (だいし) 様」とも呼ばれている僧侶です。

千住 3 兄弟とは、長男で日本画家の博 (ひろし)、弟で作曲家の明 (あきら)、世界的ヴァイオリンニストの真理子 (まりこ) の事である。兄弟が分野が違っても 3 人とも世界的な人に成長するには、やはり親の薫陶 (くんとう) が少なからずあったに違いない。約 20 年位前にテレビ朝日で放映された「題名のない音楽会」にこの兄弟 3 人が出演し、客席には 3 人を育てた母、文子 (ふみこ) さんが招待されていた。この文子さんが執筆した本「私の教育白書」には次のような事が書かれている・・・

「私がヴァイオリンニストだったら、もっと人の心を掴 (つか) んで離さない演奏をするわよ・・・私が作曲家だったら、もっと感動的な曲を書く・・・私が日本画家だったらもっと圧倒する様な作品を描く、でも私には何もない。この魂 (たましい) を表現する手段が何もない。みんなあなた達の為にこの人生を使ってきてしまったからね。でも、私の人生はこれからなのよ。見ていて頂戴私は死ぬまでに何か自分で満足できる様なものを必ず残すから」・・・

そして、長男の博が母の事を続けて語る・・・「私はクレヨンを持ち始めた6歳の頃から活発に創作活動を始めた。襖（ふすま）と言わず、壁（かべ）と言わず柱（はしら）に至るまで“ひろし”は絵を描いた。然しその落書きをされていて母に叱られるという事はなかった。むしろ落書きを中途半端にやめると、やるのなら徹底的にやりなさいと叱られた」と。お母様としては子供の才能の芽を摘（つ）まずに自分のやりたいことをやらせたという事だろう。ただ、千住家の様な豪邸ならそれも出来るが、長い間、マンションや社宅の狭い家で暮らしてきた私の様な者にとっては若干辛（つら）い気持ちもある。

そういう母の教育を受けて育った千住博は、日本画の存在やその技法を世界に認知させ、真の国際性を持った芸術領域を構築していった。代表作の「ウォーターフォール」（「落下する水」の意味、「滝」は「フォールズ」と複数形になる）は画家としては最高の栄誉であるヴェネチア・ビエンナーレで名誉賞を受賞した（1995年）。そして1997年から京都・大徳寺聚光院（じゅこういん）の襖絵（ふすまえ）制作にとりかかり、2002年の伊東別院完成に続き、2013年に京都本院の襖絵が完成した。最近テレビで見たその絵は目の覚める様なブルー色が基調で圧倒されたが、その西洋的な技法が大徳寺聚光院の雰囲気と溶け合って何の違和感を感じなかったのは少し衝撃だった。

こういう事例は私自身過去経験している。まだ学生だった頃、一人で京都の寺を回った時に、東山の知恩院で本堂から流れるモーツアルトの40番の交響曲の調べを聴いた。何の違和感もなく何かとても心地よかった。以前に福庭の洞光寺のご住職にこの話をさせてもらい、年末には同寺本堂にベートーヴェンの「第九」を流したらどうですかと半分冗談の積もりでお願いしたが、その時は笑っておられた。もし実現したら、やはり福庭にある念法寺の大きな伽藍（がらん）にはマーラーの2番の交響曲「復活」の第5楽章にある壮大な合唱音楽を流して欲しいとこれも半分冗談で考えている。

千住博さんは今、高野山真言宗総本山金剛峯寺の大主殿2部屋の襖絵を完成させこの10月にニューヨークの作業場から現地に搬入する。千住さんは、この金剛峯寺の襖絵を創作するにあたり次の様な言葉を残している・・・

「高野山にある金剛峯寺の建造物や室内の雰囲気を思い浮かべて襖絵を創作するのではなく、この金剛峯寺を造った“空海の心”を深淵まで勉強し理解し空海上人（くうかいしょうにん）と対話しながら進めて行く」と。最初に「空海」は「弘法大師」や「お大師さま」ともお呼びすると申し上げたが、この内、「弘法大師」は空海の死後に後醍醐天皇から授かった呼び名だそうだ。（完）